【7】

氏　名（本　籍）	朴（ぱく）　銓（ちょん）　烈（よる）（韓国）
学位の種類	文　学　博　士
学位記番号	博　甲　第　326　号
学位授与年月日	昭和61年 3 月25日
学位授与の要件	学位規則第五条第１項該当
審査研究科	歴史・人類学研究科
学位論文題目	「門付け」の構造 ――韓国と日本との比較民俗学の試みから――
主　査　筑波大学教授　文学博士	北　見　俊　夫
副　査　筑波大学教授	芳　賀　　登
副　査　筑波大学教授　文学博士	宮　田　　登
副　査　筑波大学助教授	牛　島　　巌

論　文　の　要　旨

本論文は，朝鮮民俗における「門付け的なもの」と日本民俗における「門付け」（家の門口に訪れ目出度づくしの言葉を述べ，フリー演技など――をつけて見せ，報酬を受けて歩くモノ）を研究対象にして，その構造分析をめぐり，韓日比較民俗学への第一歩を意欲的に試みた論文である。400字詰原稿用紙約800枚から成る。

朴氏は，「門付け」のもつ民俗社会での意味を，つぎの諸点から考察し論究している。1）門付けを成立させる時間，2）門付けを成立させる空間，3）担い手，4）現場で具現する来訪神仰の様相，5）儀礼としての門付けのパフォーマンス，6）社会的交換性の側面。以上の視点に立ち，論文の全体は大きく序論，第一部，第二部，結論の４つに分けられる。

序論は課題と方法についてであり，カドの意味，マレビト論と門付け，大道芸と門付けなどを主要項目にすえて，「門付け」の概念を規定し，ついで，朝鮮と日本との「門付け」研究史を綿密にたどり，そのなかから問題点を提起し，その解明に向けての方法論を挙げ，比較民俗学のあり方について自説を展開する。

第一部は「門付けの成立」と題し，五つの章と補遺とから構成され，第一章の序論部分で，「門付けの視点」として，農耕儀礼，村祭りとの深いかかわりを強調する。第二章で「門付けの発生と変遷」を顧み，未分化時代の様相として，現行の「門付け」でも重要な演目である歌と踏みの所作が，古代日本や朝鮮の芸能史の起源につながることに着目した。そして，歴史の進展過程のなかで，「門

付け」の専門職化がとげられてゆく道すじを明らかにする。第三章では,「門付けと暦－儀礼の機会－」について，および「暦を越えて—門付け芸人側のスケジュールから—」項目立てで，朝鮮と日本での非専門職的「門付け」と専門職の「門付け」民俗を具体的に描写し，前者では，とくに農楽隊の活躍が顕著であることが紹介されている。第四章は,「門付けを受け入れる社会—人々とその経験—」につき,「異人」は歓待されれば客人となる事例を古典と現行民俗のなかに求め，比較検討して異同を論じている。およその結論として，村落行事としての「門付け」は，村落共同体の内部の人々が演者となり，観客になるという役割分担から成立し，その成員間における権利と義務関係から，共同体内部の社会的連帯を強化する機能を果していることについて，明解に論述する。

第五章「門付けの担い手」は，本論文で力点を置く一つであり，先学の分類を系統的に整理し，それをふまえて朴氏独自の分類案が提示される。

すなわち，①「公のための門付け—儀礼的異人—」——村祭りと密着した局面に登場する青少年ら村人の手で行われるもの。②「私のための門付け」——祓いの力を具有する専門職人の「門付け」が中心。③「公私両面を持つ門付け」——公の標榜と私の利益追求を目的とするセミプロ的担い手。例えば朝鮮の巫堂や日本のイタコの場合。補遺では,「門付けの漂泊民」をとりあげ，朝鮮の被差別民といえる白丁は，日本の河原者とよばれる中世の賤民層と，じつによく似ていることを指摘している。

さて，第二部では，第一部を受け，門付け儀礼が，それぞれの社会構造に組み込まれている共同体的次元の儀礼の一つであること，したがって，儀礼の時期や儀礼を受け入れる側の社会態勢が整えられる必要性などについて，四つの章に分け順を追って展開してゆく。

第二節は「門付け儀礼の手順—訪れる側と迎える側の出会い方—」で試みる構造分析の内容は，行列の意味，訪問先の選定，演場の空間の場の性格などの項目を柱に考察が深められ,「儀礼の中心と周辺」という二つの流れ（役割分担）に要約して把握されることを，実証的に示している。二つの流れとは，中心（代表者グループ•真面目な演技）と周辺（その他大勢のグループ•不真面目—多角的演技）という構成部分に分割して演出されることをいい，この二つの部分は，要するに相反する存在ではなく，門付け儀礼として全体的統合のなかにあり，両者の役割が並立することで，儀礼本来の効果が高められることを意味すると述べている。朴氏独自の図解が示され，朝日両国の門付け儀礼が事例を裏付けにふまえたうえで,その構造要素が抽象理論へとすすめられ,本論文でウェートのかかった部分をなしている。

また，第五節では「儀礼の構成—セリフと身ぶり—」が挙げられる。朴氏は具体的には，メンシング（Mensching. G）の儀礼分類である口儀（legōmenon）と行儀（drōmenon）に則ってプリ（歌唱部分）とノリ（行為部分）が，朝鮮のクッ（巫俗的祭儀）の二大構成要素であること，そして，プリとノリとが日本の祭儀にも関わりがきわめて深いものであることに着目し,「門付け」事象から，つぎのような両国民俗比較の一つのモデル構成を試みた。すなわち，朝鮮の門付け儀礼の「地神踏み」を日本の「門付け」の事例に適用させてみた結果，両国の門付け儀礼が，構造上類似の基盤から出発したものであることの見通しを導き出している。

「門付け」の訪問者の側に立ち，迎える側との間に交わされるヤリトリに焦点を当てたのが，第三章「聖なる演劇としての門付け」で，五つの節に細分し構成されている。ここではまず，「門付け」の演者が依拠する神々，および仏教的信仰を分析し，その宗教性と芸能性とを問題にする。ついで，演者として子供が登場する場面につき，両国の事例を挙げ，大人の場合とやや異なる性格をおびていることに言及し，さらに獅子の呪力を述べる。また「穢を引き受ける門付け」の節をこの章の最後に位置づけ，「儀礼的転換」の論理を展開し，厄を祓う「門付け」が，捨てた厄を持ち去る人になる場面に転換して機能することに着目した。

第四章は，「門付けの場における交換体系」と題し，第二部の総括の意を込め，四つの節にわたり，図解をも含め論述している。結論の部では，「門付け」の本質をあらためて問い直し，今後の課題を掲げている。そこには，「門付け」に対する体系的構造分析の意義が存在することが，あらためて強調されており，本論文の主題をそのようにうたった所以が首肯される。

審　査　の　要　旨

本論文は，次の諸点が評価しうる。

1)　主題に関する領域の両国における学界の研究動向をよくふまえ，その到達点のうえに，朴氏自身の独創的な部分が，「門付け」の担い手の分類や，演目内容の両国対比とその理論化などに示されており，それらは今後，両国学界に寄与するところが大きいと考えられる。

2)　選定された主題は，アジアの民俗社会理解にとって，きわめて重要な課題であり，「漂泊と定着」とか「非農耕と農耕」，文化の現在としての「周辺と中心」など，解明の必要性が強く要望されている分野である。そして，「門付け」の漂泊民は強い漂泊能力をもっているが故に，その活動範囲を一国内に限定することは不自然で，当然，比較研究の場に持ち込まなければならない。そうした意味からも，朴氏の本論文は先駆的な業績の一つとして高い評価を得ることになろう。

3)　「聖なる」演者としてあったものが，その聖性が稀薄化ないしは剝奪されるにいたる過程――その歴史性に関しては，もう少し厚みをもたせることが好ましい。

4)　社会的贈答交換など，経済的意味や，共同体とのかかわりに重点が求められるので，具体的事例の積上げと分析がなされつつあり，それらは今後，朴氏により，よりいっそう充足されることが期待される。

5)　理論的整理と比較上の方法論は，類型をつくることで各国間の比較が容易になる。朴氏はその方面でも先導的役割を果すものと思う。

本論文は，総体的に対象とする主題を解明する所期の目的を達成するうえで，必要にしてかつ十分な条件とレベルに達していると判断される。

よって，著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。